34　大沢利夫一九五五「深見の祇園祭り」『伊那』三二八号
　二九頁。大沢が調査した時点では七月二四日が祭日であっ
　た。その後七月の第四土日が祭日となるが、行政改革によ
　り深見に加えて千木も祭りに加わるようになった。

35　阿南町文化財審議委員会編二〇一九『深見の祇園祭り』
　前掲書　五～六頁
36　同　右　七～八頁
37　同　右　一〇～一三頁

（まつざき・けんぞう　東京都板橋区）

雑誌関係要目(二)

日本歴史（八六七）　日本歴史学会
細川京兆家被官安富智安の活動と実名比定……川口　成人
△歴史手帖▽日本史のなかのウラジオストック……籠　慎一
明治初期大阪都市行政における同業組合の役割……崎島　達矢
△研究余録▽
幻の「六分の一殿」……谷口　雄太
豊臣秀次事件と金銭問題……遠藤　珠紀
△史料散歩▽江戸時代の飲酒事情……佐藤　孝之
△文書館・史料館めぐり▽武蔵野美術大学民俗資料室……田村　仁
△文化財レポート▽二〇一八年度後期の史跡等の指定（上）
△近現代史の人物史料情報／書評と紹介／雑誌論文目録／新刊寸描／新刊書案内／学界消息▽

史林（一〇三―二）　史学研究会
△論説▽
近代日本における民間団体の朝鮮教育事業と支援基盤―京城学堂の設立と運営―……郷　賢珠
△研究ノート▽
日明関係における「勘合」の形状についての新知見……伍　躍
△書評▽
平井松午編『近世城下絵図の景観分析・GIS分析』……川名　禎
Alexander Schunka, Die Hugnotten. Geschichte, Religion, Kultur……林　祐一郎
登利谷正人著『近代アフガニスタンの国家形成―歴史叙述と第二次アフガン戦争前後の政治動向―』……塩野崎信也
松田英里著『近代日本の戦傷病者と戦争体験』……津田　壮章
高橋和宏著『ドル防衛と日米関係―高度成長期日本の経済外交　一九五九～一九六九年―』……范　艶芬

地方史研究（七〇―四）　地方史研究協議会
△会告▽
二〇二〇年度第七一回（茨城）大会延期のお知らせ
第七一回大会を迎えるにあたって
△問題提起▽
亀井　翼・稲田　健一・猪狩　俊哉・笹岡　明・金子　千秋・五十嵐　雄大・林恵子・石橋　一展・山縣　創明・泉田邦彦・長谷川　良子・千葉　椎奈・川俣正英・西口　正隆・林　圭史
△論文▽
直轄県における統治と「公論」―柏崎県都中議事者制の形成過程を事例として―……荒川　将
△動向　茨城大会関連　資料保存問題
陵墓問題▽
茨城県内の中世史に関する研究会と調査事業……高橋　修
台風一九号災害における長野市立博物館の活動―民間所在の未指定文化財に対して―……原田　和彦
「奈良市・佐紀石塚山古墳（成務天皇陵）鳥居改修工事に伴う立ち合い調査見学」参加記……風間　洋

論　文

長野県の予言獣の展開

―アマヒコを中心に―

市東　真一

問題の所在

本稿は、長野県内で確認される豊作や疫病流行の予言をする幻獣[1]（予言獣）に関する資料について注目する。そこから、なぜ長野県内に多くの予言獣に関する資料が残されているのか考察する。あわせて、県内に存在する海から出現したとされる幻獣の資料も検討する。

令和元年（二〇一九）一一月から武漢より流行した新型コロナウイルス感染症の影響により、社会生活はもとより様々な民俗行事が中止、縮小していった。コロナ禍において、SNSを中心にその姿を見ると疫病から逃れられるとされる、アマビエという妖怪の画像やイラストが流行していく。筆者は、令和二年（二〇二〇）より自身が製作したアマビエの護符を事例に、その流行について分析を行ってきた[2]。その中で、長野県には「アマヒコ」という予言獣資料が存在することを知る。さらに、筆者はアマヒコの他に長野県に存在する予言獣の資料の収集を続けた。そして予言獣の資料の他、複数の海から出現したとされる幻獣に関しての資料を見つけることができた。その中で、筆者はなぜ長野県内にはアマビエと同種の予言獣に関する資料が多く存在しているのかについて疑問を持った。

従来の予言獣の研究では、伝播や広まっていった社会背景などに注目は集まったものの、資料が実際に存在する地域との関連性などについての検討があまり行われていない傾向にあった。そのため、長野県内の予言獣の展

開を見ることによりその資料性や存在意義について新たな知見を提示できると考えた。そこで、本稿では長野県内に存在する予言獣に関する資料を事例に、各時代の流行の様相から存在について検討を行う。そこから、なぜ長野県内に多くの予言獣に類する資料が存在するかの理由について考察する。

一　アマヒコをめぐる研究

予言する幻獣について早期から、言及したのが湯本豪一である。湯本は、アマヒコは瓦版や絵入り新聞に登場する病気や豊凶の予言をし、その絵姿を持っていれば病難などから逃れられるという護符としての機能を指摘する。また、件や神社姫といったものと同類であるとした〔湯本　二〇〇三　一二二―一二三〕。常光徹は、「人面犬と件（クダン）の予言」の中で、予言する妖怪として件と神社姫の一種として触れている〔常光　二〇〇三　一二八〕。平井隆太郎は、アマビエを託宣型瓦版として、単なる情報媒体だけではなく護符としての実用性があったことを指摘する〔平井　一九七八　四六〕。その後、長野栄俊は各資料のアマヒコを比較し、詳細に分析を行った。長野によると、アマヒコなどの予言獣は文政期頃（一八一八～一八二九）より流行が起こり、文化年間（一八〇四～一八一七）に流行した三猿による予言と称した瓦版などが変化したものであるとした〔長野　二〇〇五　二〇〕。彼らの研究では、アマビエの伝播経路や予言する妖怪の流布、護符としての機能を中心に検討が行われていた。さらに現在、コロナ禍の影響で各地の博物館では所蔵する予言獣の紹介や解説が行われてきた。[3] その中で細木ひとみは立山に出現したとされるクダベという妖怪について分析した。細木はクダベが立山に出現する背景には、立山が霊山であるとの認識の中で霊獣や瑞獣の類が出現してもおかしくない山中他界の観念が大きく影響していると指摘する。この細木の指摘する予言獣の出現場所に関する検討こそ、今後の予言獣の研究において重要な視点であると考えられる。

これらの予言獣をめぐる研究は、予言獣の実態とその伝播の過程について検討が行われてきた。特に護符という面が検討されていた。一方で、これまでの予言獣の研究では資料が現存している地域との関係性、存在している意味についての検討があまりなされていない。

本稿では、長野県内に現存する資料をもとに、長野県内の予言獣の展開について分析を行う。そこから、なぜ

長野県内には予言獣に関する資料が数多く存在するのかについて検討する。

本稿で対象とする資料では、予言獣が記されている古文書やそれについて触れている新聞記事を参考にする。

二　長野県内のアマヒコ

1　江戸時代の予言獣

雨彦と件と霊鳥　長野県内に確認されているアマヒコの最古の資料は、佐久市五郎兵衛記念館所蔵の「雨彦全之図」である（図1参照）。この資料には、三本足の猿の姿のような図と以下のような文言が記載されている。

図1　雨彦全之図

雨彦全之図　　不出来ニ御座候

天保十四卯五月中旬／肥後国熊本海中に／毎夜猿の如くの声／にて人を呼同家中／柴田五郎右衛門と申人見届／候処我はあまひこと申者此海中に／すむ也今年より六ケ年の間豊年乍去病人／多く人六分通り死すべき也我姿を見尋ハ／其難を逃れ候まし姿をうつし諸国へ／しらしむべしと申候て海中にしつみ入る

この資料によると、天保一四年（一八四三）五月中旬に肥後国熊本の海中から毎晩猿のような声が人を呼ぶので、柴田五郎衛門という人物が見に行くと、海中から「あまひこ」と名乗る怪獣が現れる。「あまひこ」は、私は海中に住むものでこれから六ヶ年の間は豊年であるが、病気が多く六分通りの人が亡くなる、私の姿を見ればその難を逃れることができるので諸国へ知らせるようにと言って海中に戻っていった。また、この資料には三本足の猿のような図が記されており、その脇に「不出来ニ御座候」と記されている。この古文書群を記したのは

図2　件（くだん）という獣の図

土屋彦左衛門とされている。土屋彦左衛門は、佐久市の五郎兵衛用水の維持管理における最高責任者を務めた人物である。また、治水や用水の関係だけにとどまらず天象、地象に深く関心を持ち、多くの文書群を残している。その他にも、土屋彦左衛門は書画や華道に造詣が深い人物でもあった。土屋彦左衛門は、件と呼ばれる予言獣についても記している（図2参照）。この「件（くだん）という獣の図」においても、「雨彦全之図」と同様に図と共に件についての説明文が記されている。

大豊作を知らする／件と云獣なり／右は天保七申十二月丹波国倉橋山の／山中に此図の身姿牛あらわれ出／たり面は人に似たり／むかし件と云獣なり／むかし宝永二年酉／十二月にも此件出たり／翌年より豊作打／続しも古き書に見へ／たり尤も件と云／字もにんべんに／牛と書てよむ也／至て正直成る獣なり故物証文／と終わりにも如件と書も此縁／也此絵図也此絵図を張置ば家／繁盛して諸病をうけ／ず一切のわざわひをまぬかれ大豊作を守る／誠に目出度獣なり

この資料には、件が豊作を知らせる瑞獣として紹介されている。また、同資料には人の顔をした牛のような件の図が記されている。さらに、天保七年（一八三六）一二月に丹波国の倉橋山の山中に図のような人面の獣が現れたと記されている。さらに、過去において、件が出現したその翌年には豊作が続いたとあり、証文になどに「如件」と書くのもこの由縁であるという。この件の図を貼れば家は繁盛して諸病を受けず、一切の災いを免れて大豊作を守る誠にめでたい獣であることも書かれている。この件の資料には、「雨彦全之図」とは異なり豊作の間に六か年疫病が流行して、六分通りの人が死亡するような文言は存在しない。

江戸時代に記された予言獣　これらの資料以外に真田宝物館に所蔵されている随筆『朝陽館漫筆』九一巻にも、肥前国平戸に出現した予言獣の霊鳥についての記載がある。ここでも、先の予言獣の資料と同様に図と文言が記されている（図3参照）。

天保十巳亥七月十日夜五過、肥前国平戸へ何国よりか霊鳥来り、我ハ神の使なり、是より七ヶ年は豊年相続、然所悪敷病流行して人七分通り死去也、我が姿を画きてこれを見れバ、其病難を除き福寿円満也

この随筆には天保一〇年（一八三九）七月一〇日に、肥前国平戸へ異国から霊鳥と呼ばれる鳥が来て、「私は神の使いである。これから七ヶ年は豊年が続くが悪しき病気が流行して七分通りの人が死ぬ」と予言する。そして、尼彦同様に「私の姿を見ればその病難を除き福寿円満なり」と語ったことが記されている。この『朝陽館漫筆』は真田家に仕えた家老の鎌原桐山が記した随筆である。鎌原桐山は漢学者でもあり、佐久間象山、山寺常山とともに、松代三山と称された人物である。

現在、執筆者の確認できている県内に存在する近世期の予言獣の資料は、先に紹介した三点である。これらの資料は、記載した人物が判明しており、比較的身分が上位の人びとが書き残している。また土屋彦左衛門が残した文書群には京都の池坊華道の家元から送られた書状などが多く残っている。そのため、比較的県外からの情報が多く土屋家に伝わっており、その中でこの件やアマヒコの文書が伝わり記されたのではないか。「件（くだん）という獣の図」に記された文言と共通する天保七年（一八三六）の瓦版が存在する（図4参照）。

大豊作をしら須／件と云獣なり／丹波

図3　『朝陽館漫筆』九一巻の「霊鳥」

図4　天保七（一八三六）年の件の瓦版

国与謝郡何某版／天保七申十二月丹波の国／倉橋山の山中に図の如く／からだハ牛面は人に似たる／件といふ獣出たり／昔宝永二年／酉の／十二月ニも／此件出て翌年今／豊作打つゞき候と古き／書ニ見えたり尤件といふ文字ハ／人篇ニ牛と件と読す也至て正直／なる獣故に都て證文の終にも如件と書も此由縁也／○此絵図を張置バ家内繁盛して他病をうけず一切の禍をまぬかれ大豊年を得る誠目出度獣なり

〔堀部　一九九四　二二〇〕

この瓦版は主に西日本で出回っていたとされている。先に記載した五郎兵衛記念館の「件（くだん）という獣の図」と文言が共通している他、書き直した形跡もあるため天保七年（一八三六）に流布した瓦版を写したものであると考えられる。

鎌原桐山の記した『朝陽館漫筆』でも、県外の地域に自生する植物や天狗の骨や人魚のミイラ等の様々な事物について記載がなされている。さらに、その中には海から漂流してきたものの報告も多く存在する。これらの近世資料を分析すると、比較的身分の上位の人びとが好奇心で他地域に存在する珍しい事物を書き記し、その中で予言獣が県内に伝播していったと考えられる。

2　明治時代の尼彦の流行

新聞に記されたアマヒコ　長野県内で確認されている近世の予言獣に関する古文書は、先にあげた「雨彦全之図」と「件（くだん）という獣の図」と「霊鳥」の三点である。一方、明治時代に関してはアマヒコが新聞で取り上げられるようになる。明治九年（一八七六）六月二四日の『長野新聞』には、アマヒコの流行について次のような記述が存在する。

茲に肥後國青沼郡磯野濱にて毎夜人を呼びあるへは其身より光りをはなちなど其おそろしき形容に諸人おの、きおそれえ近付ものなし然るに旧熊本藩士芝田忠太郎といふ人が通りか、ッて何者なりやと問しに彼の怪物が答に我れは海中にて司執る尼彦といふものなるが本年より六ヶ年の間だは豊年なれども当年は国中劇烈の難病が流行て六分通りもの人が死するなり依て我が形容を写して朝夕見るものは此病症を免れん此事を告んため毎夜この所へ上りて待ち居たるなりと言しに付諸人尼彦入道と号けて銘々此の形容をうつして持ち居るが諸新聞にも出てあるといふ風聞だが本統かとある方より図をそへておくられましたからその図面を記載してお目にかけますが記

者は斯ナことは決して知りません諸新聞にも出てハないがしかし不開化の諸人方には誠に困り升箇様なものを写して見るより諸新聞を見て身の養生を能くおやりなさい〔長野新聞　一八七六　a〕

この『長野新聞』によると記者のもとへ怪物の姿を記した「尼彦入道」なる紙が送られてきたことが記されている。それによると、肥後国青沼郡磯野濱で毎晩人呼ぶ声と発光があり周辺の人びとは恐れて誰も近づかなかったとある。そこに、旧熊本藩士の芝田忠太郎という人物が通りかかった所、海中から「尼彦」と名乗る怪物が現れ、これから六ヶ年は豊年であるが当年は国中に劇烈な難病が流行して、六分通りの人が死亡することを告げる。そして、自分の姿を写したものを持っている人はその病を逃れることができるという。そのことに関して、新聞に掲載されていると記述されてあるという。それについて新聞記者は、尼彦について新聞に掲載されておらず、この「尼彦入道」を信じる人々を「不開化」な人であるとした。最後に尼彦を書き写して病を防ごうとするよりも、諸新聞を見て養生しなさいと述べている。この尼彦の姿は江戸時代の「雨彦全之図」のような猿のような姿とは異なり、我々が見慣れた生き物とは明らかにかけ離れている（図5参照）。また、一方で左を向いており三本足であるということは共通している。この新聞記事では、「銘々此の形容をうつして持ち居る」と記述されており、当時の長野県内において様々な形態のアマヒコのような存在が流行していたと考えられる。

図5　『長野新聞』のアマヒコ

その後、明治九年（一八七六）六月三〇日『長野新聞』には、山梨県の甲府日々新聞に記された「アリエ」という妖怪について記されている。

甲府日々新聞に下の図をあらはして不開化人はチラリホラリと貼た者があるといふが困ッた事だと記載してあり升が肥後の國青鳥郡に旧熊本藩士柴田某が此妖怪を見とめて名を聞たれば妖化は（アリエ）

といひし由当社百拾六号の新聞に記載せし肥後の國青沼郡にての件と同説なるゆゑまたくその図面を写して皆さんのお笑ひ種に無稽の毎談にしてたらざる確證を明さん先第一肥後の國には○天草○葦北○玖麻○八代○益城○宇土○飽田○託麻○合志○山本○玉名○山鹿○菊地○阿蘇の十四郡あれども青鳥青沼等の郡決してあらず是その妄説なる證とすべしまた第百拾六号と当号に図する所の怪物は造化の神の弄玩に出来て世界の間に萬に一つ有ッたにせよ霊妙不測の才智を備えし人間より尊ときものはありませんゾそれに人よりいやしき鳥獣魚虫や怪物の形容を写して災難除だの悪病除だの十方途轍もない白痴の最上無類能切これで未開人お目がさめたで五座りましやう待テ有レ暇而メ読ミ書キ必ス無ニ読ク書キ之時一とこれ広く書を見て箇様の惑ひを明らかに弁解したまひと申す事なり〔長野新聞　一八七六　b〕

この新聞記事によると、『甲府日日新聞』にアリエの図が広まっていることが記載されている。『長野新聞』一一六号と同様に、青鳥郡や青沼郡という地名は実在しないことと、仮にこのような怪物がいたとしてもそれを見ることによって疫病除けなどの効果はないことを述べる。特にこれらを信じる人に関しては、「十方途轍もない白痴の最上無類能切」と強く非難している。この記事でも、この予言獣の図を信じる人びとを「不開化人」として冷ややかな目線を送っている。また、この新聞には四本足のアリエの図が記されている（図6参照）。この『長野新聞』が言及した『甲府日日新聞』は明治九年（一八七六）六月一九日号の記載である。『甲府日日新聞』には以下のように記されている。

○妖言の起るは未開の國の徴にて実に困つた習慣では五座りませんか。多分虚妄な説なれど、又変な事

図6　『長野新聞』のアリエ

が伝播出しそうゆゑ、一寸お笑種に図を入ませう。肥後の國青鳥郡の海に斯んな可笑しなものが居て、夜にさへなれば往来へ出てピカピカ鱗を光らせ歩くゆゑ見る人々は吃愕し青くなつて逃げ出すと、斯の魍魎はとかく娑婆の人を恋ひしがる体にて、通るものを呼よすれど誰ひとりよりつくものなく、遂いその路をば行く人の絶たとか。大評判せし折から、流石剛気な旧熊本藩の柴田某なるものが斯の様子を聞伝へ、いざ性体を見届くれんと、或る夜同所へ出掛遅し遅しと待ちかねし内、彼奴は又例の通り鱗を光らし来るを見て、「コリヤ待て妖怪め」と咎めたるに、彼奴は柴田某に向ひ、「我こそは海中鱗獣の首魁にて名はアリエ」と唱へたり。かつて年の吉凶を洞間の妙術あれば語げ示さんとすれど、身共が姿のありやうを見て語らひ玉ふ人のなく、縁るべなき折から忝なくも御辺に逢ひつるこそ幸ひ、日ごろの胸を語り参らせん。当年より六ヶ年の間豊年打続くべし。されど当六月より先年流行せしコロリの如き病気流行して世の人六分通り死失べし。能く此の災難を避んには、身共が姿容を図し置て朝な夕な信心し玉ひかし」と云ひ畢り、ドロンドロンと海中に踊り入りて影さへ見えず。某はハテなと眺むれば、夜は暗し、いとも海風の腥きを覚へたるのみとぞ。夫よりして談が広まり該地のものはサア斯図を絵いて毎戸にはりつけて稼業も棄てて抛て信心するかと云ふ事を、出雲の國の船頭が新潟県にて物語りたるよし。いづもの人か知らないが、余り人を茶にした話ではありませんか。お布告や註違書などの銘々心得ねばならぬことは、馬耳に風して斯な馬鹿気た事だと誰れ頼まぬに裏店小店までも我先きにと貼立騒ぐとは、何う云ふもんだろう。此の妖怪の説しも何分本統とは思へません。皆さん決して図を貼るにも信心するにも及ぶまいと云はんとすれば、最はや当県の市在でもチラリホラリ張りつけてあるとの由、困つたものだ。〔甲府日日新聞　一八七六〕

この新聞記事では、先の『長野新聞』でも述べた通り、肥後國青鳥郡の海中より現れた「アリエ」という妖怪について記載されている（図7参照）。また、アリエの正体に関しては「海中鱗獣の首魁」とある。さらに、『長野新聞』と同様にアリエの図に関して、虚妄であると批判している。一方で、様々な店舗や家などの戸口にこのアリエの図を貼り付けていることも記述されている。

図7 『甲府日日新聞』のアリエ

明治時代のアマヒコの流行 『長野新聞』では県内で尼彦が流行しており、さらには新聞に掲載されたなどの文言が記されているなどの記述があった。近年発見された神奈川県在住者が個人所蔵している文書には[4]『長野新聞』一一六号で記されたアマヒコと酷似するものが存在する。

肥後国青沼郡之磯浜ニテ、昼／夜人ヲ呼ビ或ハ光ヲ発シ、人大ニ恐／近付者ナシ、有時熊本ノ士族／芝田忠太郎通リ掛リ、是ヲ／見届ルニ、彼カ申ニハ我ハ海／中ニ司執ル尼彦ト申者、当年ヨリ六ケ年豊作也、当年／ハ諸国急病ニテ人ハ六分通リ死ス、雖然モ我カ姿ヲ／朝夕見ル者除クルト云也

明治九丙年子五月吉日

図8 「尼彦図」の尼彦

この文書は、明治九年（一八七六）五月に記されたものであり『長野新聞』一一六号に記された文言と一致しており描かれた尼彦の姿も酷似している。この資料の出自については不明であるため、どこで配られたものかは不明である。当資料に記されているアマヒコの姿は、『長野新聞』に記されたアマヒコの図に酷似しているため長野県内で流行した可能性がある（図8参照）。しかし、実際にそれを裏付ける資料に関しては、これまでは確認されていなかった。

発見された「尼彦之姿」 令和二年（二〇二〇）九月二三日、郷土史家横田國政氏の自宅からアマヒコの新資料が発見された。発見された古文書は、「尼彦之姿」というものであった。大きさは縦一四㌢、横一九㌢の比較的小さな文書であった（図9参照）。横田氏に確認したところ、一〇年程前に四賀村の表具店から書画を解読した報酬として、大量の襖の下張りを頂いたという。それを一枚一枚はがして、解読が可能なものは自身が講師を務める古文書講座の史料として使用していた。その中から、この尼彦の古文書が発見された。この尼彦の古文書は肉筆で尼彦の姿とその由来について記されている。内容は以下の通りとなっている。

図9 「尼彦之姿」

尼彦之姿

頭毛渾テ金色也、又体毛渾テ銀色也

肥後国生青郡之磯ケ浜ニ治[治ヵ]テ、昼夜人ヲ呼ビ、或ハ海中ヨリ光輝ヲ発シ、然ル時、熊本／藩士族芝田忠太郎ナル者通リ掛リ、確ト見届シテ、尼彦ノ曰、我ハ路中ヲ可ルモノナリ、／当年ヨリ六年ノ間ハ豊作也、去レドモ本年ハ凶病ニ依テ而、人民六歩通リ死没ス、是ヲ攘／ハント欲セバ、我姿換[描]画シテ顧ルベシト聞ニ依而、早々ト其姿ヲ写シ、諸国エ投露セシ／者ナリ、右謹テ見ルベシ／明治九年四月六日／右之次第新　朝[聞ヵ]　ヨリ報知者之候故各一リ　相観可キ事／牛山家居病セサス／為尼彦ノ姿ヲ画キシ以所ナリ

内容は、肥後国の生青郡磯ヶ濱という場所に尼彦が現れ、熊本藩士族の芝田忠太郎が「これから六年間豊作ではあるが、凶病により人民が「六歩通り」死没する。私の姿を写せば病にかからない」といい、早々とその姿を書き写したものであるという。また、その次に右の事は新聞に明記されているような記述も確認できる。何より最後に「牛山家」という家のために尼彦が書き写されたと思われる記述が見受けられる。興味深いのは、文中の図の横に頭髪は全て金色、体毛は全て銀色と尼彦の体色について言及していることである。

明治九年（一八七六）六月二一日に刊行された『長野新聞』一一六号には、新聞記者のもとに尼彦という三本

足の猿のようなものが描かれた紙が送られたことが記されている。そのことについて記者は、「斯ナことは決して知りません諸新聞にも出てハないがしかし不開化の諸人方には誠に困り升箇様なものを写して見るより諸新聞を見て身の養生を能くおやりなさい」と否定している。今回発見された尼彦の古文書は、四月六日の日付があることから、先の『長野新聞』よりも二ヶ月程前に記されたものと考えられる。また、尼彦が現れたのは肥後国であり、目撃した人物も芝田忠太郎であったりするなど、共通点が多く存在する。また同新聞には「諸新聞にも出てあるといふ風聞」のようなことが記されていたという。『長野新聞』一一六号の尼彦の姿は三本足の怪物のような姿であるが、「尼彦之姿」の姿は足が七本程ある大きな鼻を持った猿のような姿（図10参照）で書かれている。一方、『長野新聞』一一六号には尼彦が出現した地名は「肥後の國青沼郡磯野濱」とあり、「尼彦之姿」は「肥後国生青郡磯ヶ浜」とあり、地名が異なっている。先に説明した「尼彦図」においては、地名や目撃者の名称が一致している。これらは、肥後國にこの地名は存在しない。そのため、書写されていく間に地名が変化していったと考えられる。また、襖の下張りから見つかったことから「尼彦之姿」は、当時は雑紙として扱われていたと考えられる。また、誤字が多いため子どもが記した可能性もある。

このように、現存する尼彦の資料を見てみると、実際に明治時代の長野県内では尼彦が流行していたことが窺える。しかし、それらは先行研究で指摘されたように護符として信仰の対象とされていたのかは疑問が残る。

図10 「尼彦之姿」の尼彦

三　海の予言獣

海から現れるもの　以上、長野県内のアマヒコの資料を中心に検討を行ってきた。その中で、なぜ長野県内に予言獣の資料が多く存在しているのかについて考察する。

先に紹介した『朝陽館漫筆』を所蔵する真田宝物館では、真田家に関する資料を多く所蔵している。その中には、アマヒコ同様に見ると病難を逃れるとされる動物の図が複数存在する。その一つに両国で行われた見世物に関する瓦版がある（図11参照）。

来ル七月十日より

海獣　俗よんで　海獣　うみのおばけ　　かつ川　長徳斎画

河海之大なる龍鼉鮫龍／魚鼈をも生じ其種／紛、

図11 「海獣瓦版」

として大同小異／其性不可計爰に／天保九戌初夏／相州江之嶋海上ニ／浮む漁人是を見るに／辨才天の岩屋に向浪上ニ／ぬかつく如して去る事数日同國辻堂ヶ浦ニ／漁人の網におのれと入て誓て世界ニ現ス／其性太陽之気を好み人語を聞喰足る時ハ／勢ひ極る盛也今武江に当来して／やごとなきかた〳〵の尊覧に入れこたび希て／諸君の貴覧に備ふ聖代之麒麟上世之白雉旱亀の／祥瑞にひとしく御代泰平國地豊饒のためし／明也魚獣ニいへども神を敬して形を人界に現ス看覧之／人々に真心を以て一と度見る時ハ無病延命にして／諸願を円満し福徳不可量なるべし

西両国におゐて御覧に入仕候太夫元　板元　森屋治兵衛

この資料の内容は、天保九年（一八三八）の初夏に相州江之嶋海上にアザラシかアシカのような海獣が現れて、その後辻堂ヶ浦に漁師の網に引っ掛かり捕獲されたというものである。さらに、この海獣については「聖代之麒麟上世之白雉旱亀のように御代泰平國地豊饒のためし明也魚獣ニいへども神を敬して形を人界に現

ス」とあり、この海獣が麒麟や白雉や霊亀の一種であると記されている。さらに「看覧之人々に真心を以て一と度見る時ハ無病延命にして諸願を円満し福徳不可量なるべし」とあり、見ると無病延命や諸願が成就する福徳があると記されている。同様に、同じく相州で現れたとする「怪魚」の図においても、同様な文言が存在している（図12参照）。

相州浦賀之濱ニおいて昼夜共晴天／折出て人々是を見て恐れ此度何朝之濱／ニ而生取ル是を見る人病難をまぬかれ候／よし先年今是を言伝

一　頭ニせう〳〵の如し　一　眼ハかがみの如し
一　腹ハ金色ニ光り　一　面ハ馬の如くねこニにたり
一　左右のひれ手足如し　一　夜ハ岡ニ上リ昼ハ海中ニ入

右ハ今昔めつらしき怪魚也

鳳霜魚（ほうそうぎょ）
一名□（ヒカ）本魚言

この資料は年代については不詳であるが、相州浦賀に昼夜に現れる怪魚について記されている。これによると「是を見る人病難をまぬかれ候」とあり、見ると病難を免れると記されている。また、「波挫虎龍」という陸上で見つかった生物について記されたものもある（図13参照）。

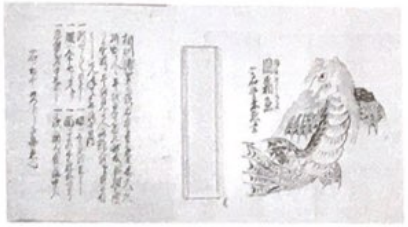

図12　「怪魚の図」

図13　「波挫虎龍之図」

波挫虎龍（ハザコリヤウ）　一名和合魚

濃州加茂郡大平村ニテ猟師重兵衛捕之／尤六十一年目ニ谷川今上ルといへり雄雌連立て／其中至て睦ま敷取に所の俚俗崇て／和宮神ト称ス此度御当所ニおゐて奉御覧ニ入候

雄三尺五寸／雌三尺八寸

尤享和二年の頃板橋宿水車／関下ニて夜な〳〵児のなく／こえ致故所のものふしんニ／思ひ関を留生とり見るニ／魚也是を鯢魚ト申／御両丸様へ奉上覧

ニ入候ト／可致此魚かせの迄は壱丈弐尺／程ニモ可成候故見るニハ悪敷／病をきり武運長久家栄昌／のもとひを開くとなん

すへて縁遠地き男女とも此魚を下度見時ハ／其縁ある事□たいの魚也旦小児乳母に／馴深さるもの此魚を見る時はたちまちなし／むといへり

この山椒魚のような生き物に関しては、濃州加茂郡大平村の重兵衛という漁師が捉えたと記されている。文中では、享和二年（一八〇二）に板橋宿の水車近くでとらえたという。先ほど挙げた資料同様に一目見ると、病難どころか武運長久や家の繁栄、さらには良縁成就などの様々な効果が記されている。山から出現して、見ると幸福を授ける動物の資料は、この「波挫虎龍」の一点だけである。

海への好奇心　真田宝物館で公開されている資料には海から出現する奇妙な生物のものが圧倒的に多く存在している。また、海から出現した奇妙な生物に関する資料には、疫病を逃れるなどの効果が記されていないものも存在する。

文化二年丑五月朔日ニ打留ル／右之魚此度松平出言守様御領内／越中国放生ノ渕四方ノ浦と申所二而／飛出ル事一日二三四度ツヽニ御座候／依之海上あれ猟一向無御座候ニ候／松平加賀守様今人数差出シ鉄砲四百／五拾梃ニ而打留申候海上飛上り候／事二拾四五時ニ而死ス此ゑ出向／七日目加州金沢城下（しやうか）蚊火致／おそろしき事ニ候依之御評定所／御注進絵図いたし写記なり

一たけ長サ　五間五尺五寸
一かほ長サ　三尺五寸
一かみの毛長サ　壱丈四尺五寸
一ひれの長サ　六尺九寸

この資料には、文化二年（一八〇五）五月一日に越中国枚生渕四方ノ浦という所で目撃された人魚の図が記されている（図14参照）。この人魚に対して松平加賀守が率いる数人が発砲したところ海が荒れ、さらには、七日後に金沢城下で大火が起こったと記している。人魚についての資料に関しては、アマビコ同様に予言をして去るというものが非常に多い。しかし、この人面魚に関しては予言をすることはなく、災いが起こったということが記されている珍しい資料である。このように、真田宝物館に保管されている資料では陸上で発見された奇妙な生物の報告よりも、海から出現したとされる生物の報告が明

図14 「人面魚の図」

らかに多いのである。

細木は、件の一種である妖怪クダベが越中立山に現れるということについて「立山衆徒たちの布教勧進活動によって立山への信仰心が芽生え、そこから生まれた立山に対する神秘性と未知の世界への期待感が広まったこと」〔細木 二〇二〇 九三〕が大きく影響しているという。また、同様に細木は山梨県立博物館や国立公文書館等で所蔵される両頭の鳥にも白山より出現したという記述があり、人びとが白山を「両頭の鳥が現れてもおかしくない場所」〔細木 二〇二〇 九三〕として捉えられていたことを述べている。この山中にクダベが現れる認識については、立山の信仰的な認識に裏付けられて登場したと考えられる。一方で、長野県内にはアマヒコの資料の他、多くの海から現れた奇怪な動物についての資料が残されている。この海から漂着した生物の報告が多くあることに関しては、海への関心があったのではないかと考えられる。明治時代に海から現れた尼彦が流行したことに関しても、「海には人知を超えた幻獣が現れても不思議ではない」という意識があったのではないかと考えられる。それらの意識から海から現れたものに関する文献を収集していったため、長野県内に海から現れた生物、妖怪が多く存在していると考えられる。

結論

長野県内の予言獣の資料を検討すると、江戸時代に残された資料は武家などの比較的身分が上の人びとが記録していることがわかる。これらの資料は海から現れたものに対する好奇心が大きく影響している。また、明治時代には新聞などのメディアに複数登場している。これらの新聞では、アマヒコの存在について未開化などと批判し、近代化への啓発が謳われている。しかし、皮肉なことにそれらの記事が予言獣の研究資料となっている。何より、予言獣の図に関しては、護符として認識されるのではなく襖の下張りから発見される等、当時は雑紙として扱われているのではないかと考えられた。今後の研究においては、アマヒコを配る人とそれを受けとる人との

分析が必要だと考えられる。

本稿は、「葉書でつぶやく「長野新聞」のアマヒコ―長野県版のアマビエ―」（『長野県民俗の会通信』二七八号 二〇二〇年七月 長野県民俗の会刊行）、「発見された「尼彦之姿」（『長野県民俗の会通信』二八〇号 二〇二〇年一一月 長野県民俗の会刊行）を大幅に加筆修正したものである。本稿の執筆に資料を提供いただいた松本市市立図書館、佐久市五郎兵衛記念館、真田宝物館、横田國政氏に感謝の辞を以って本稿を終了する。

註1 アマヒコにおいては、湯本が「幻獣」「予言する幻獣」、長野が「予言獣」という用語を提示している。その他の研究者においては「妖怪」という用語も使用されている。執筆者も過去の報告の中で妖怪という用語を用いて、コロナ禍のアマビエについて論じてきた。本稿では先行研究との関連も踏まえて予言獣の用語を使用する。

2 この詳細は拙稿「しづかアメビエの展開―長野県松本市での実践について―」（『長野県民俗の会会報』43 二〇二〇）に記している。

3 梅野光興 二〇二〇 「コーナー展 疫病退散」『岡豊風日』一一〇号 高知県立歴史民俗資料館

4 この資料は、平成三一（二〇一九）年に骨董市で購入したものであるという。

〈参考文献〉

浅科村教育委員会 一九九二 『五郎兵衛新田古文書目録 第五集』浅科村教育委員会

常光徹 二〇〇二 『学校の怪談―口承文芸の研究Ⅰ』 角川ソフィア文庫

長野栄俊 二〇〇五 「予言獣アマビコ考―「海彦」をてがかりに」『若越郷土研究』 四九巻二号 福井県郷土誌懇談会

長野市教育委員会文化財課 二〇〇八 『真田宝物館企画展 これなあに!? 江戸時代の好奇心』 長野市教育委員会文化財課

湯本豪一 二〇〇三 「予言する幻獣―アマヒコを中心に―」（小松和彦 二〇〇三 『日本妖怪学 大全』小学館）

梅野光興 二〇二〇 「コーナー展 疫病退散」『岡豊風日』一一〇号 高知県立歴史民俗資料館

平井隆太郎氏 一九七八 「かわら版・新聞」江戸・明治三百新聞Ⅰ大阪 夏の陣から豪商銭屋五兵衛の最期』 平凡社

細木ひとみ 二〇二〇 「疫病流行を告げる「クタベ」と越中立山に現れた理由」『立山博物館研究紀要』二七号 立山博物館

堀部功夫 一九九四 「件管見」『同志社国文学』四一号 同志社大学国文学会

〈新聞記事〉

明治九（一八七六）年六月一九日 『甲府日日新聞』六月一九日号

明治九（一八七六）年六月二四日 a 『長野新聞』一一六号

明治九（一八七六）年六月三〇日 b 『長野新聞』一一九号

（しとう・しんいち 長野県松本市）

編集後記

一〇〇〇号特集号の関係で三月の発行となりましたが、民俗学特集号をお届けします。

民俗学では対面による聞き書きが、基本的調査方法です。聞く者と聞かれる者、時にはその立場が逆転したりしながら、調査は進行します。聞き書きの場とか調査者と被調査者との関係のありかた等で、採集資料も微妙に異なってきます。そこから、民俗学の資料は客観的な物なのかという問題が生じて調査論となり、調査そのもののあり方を問う、という研究もあります。

ところが、今のコロナ禍の状況では、対面による調査をなかなか実施することができません。調査できないで民俗学など存在するのか、といわれてしまいます。私自身の調査でも、石造物などを探して歩いても、その物に関する情報を聞き取る事には躊躇を感じて、積極的には行っておりません。そうした状況を反映してか、今回の掲載論文では、既刊の報告書や文献史料などから事例をひいて吟味する、といった方法をとったものが多くありました。

板橋春夫氏の「和市の小屋」では、長野県境にほど近い、愛知県北設楽郡田口町和市に存在した産屋の呼称をめぐる、研究者のいくつもの言説を比較検討し、報告者のまなざしやケガレ観を明らかにしました。コロナ禍で生理用品すら満足に用意できないという女性の困窮状態が、昨年は報じられました。ようやく今になって女性の生理について、公に語ることができるようになったのです。それは、出産や月経をケガレタものとする意識がなくなってきたことを示していますが、そうした観念やそれに伴う習俗もなかったことにしてはならないでしょう。

松崎憲三氏の「長野県下の祇園祭り」では、長野県内の祇園祭りを、八坂神社系と津島神社系とに分け、津島系に視点を据えて飯田市内の祇園祭り（津島祭り）を概観し、佐久市岩村田と阿南町深見の祇園祭り詳しく分析しました。結果、津島系の信仰や習俗を取り込む形で、長野県内に定着してきたことを明らかにしています。

市東真一氏は、予言獣として伝承されてきた「アマヒコ」について、江戸時代以来の長野県内外の資料を渉猟して検討を加え、系譜を明らかにしました。資料の検討の中で、海の無い信州に住む人々だからこそ、海には人知を超えた幻獣がいてもおかしくないという意識があったのではないかと推定しています。

近藤大知氏は、新野の雪祭りに登場する「幸法」と「茂登喜」との役割を、折口信夫のもどき論を基に比較検討しました。そして、茂登喜は土地神を祀る者の象徴であるとし、雪祭りを、来訪神を土着の精霊がもてなし霊振りをするという、折口のテーゼによって解釈しています。

渡邊太祐氏は、長野県ではオセイニチといわれる「三とき」の起源と変容について、文献資料を用いて明らかにしました。習俗としては先祖供養をし、仕事を休むといった内容の三ときが、中世では午後に食事を摂らないで慎むことをさしていたといいます。それが百万遍念仏を唱える形に変り、その後今見るような行事となったということです。長いスパンでの習俗の変化がわかります。

コロナの影響で多くの民俗行事が中止や簡略化となり、変容を迫られている事が気になります。

（福澤昭司）

信濃　第74巻　第3号

2022年3月20日発行（令和4年）　定価 1,150円　送料 79円　会費 1カ月 850円　6カ月 5,100円　1カ年 10,200円

編集兼発行者　信濃史学会
会長　小松芳郎
会誌編集委員長　後藤芳孝

印刷者兼印刷所　長野県長野市西和田1丁目30番3号　信毎書籍印刷株式会社
取締役社長　竹内定美

発行所　長野県松本市村井町南1－28－35　信濃史学会
電話/FAX　松本(0263)58－1213
http://www.shinano-shigakukai.jp/
Email　shinano-has@po.mcci.or.jp
振替　長野 00500－8－16995
郵便番号　399－0036

会費納入のお願い

本会は皆様が納入される会費で会活動が成り立っています。三月は令和三年度の最終月で、会計を含めて会活動の締めをする時期にあたります。

つきましては、会費の納入にご協力いただきますようお願いいたします。なお、会費は前納制です。

会費の納入方法ですが、会誌の第七三巻一一月号に振替用紙を貼りこんでありますのでご利用ください。また、本誌巻末にも振替番号が記載してあります。

学生会員の方で、この四月から学生会員資格が無くなる方は、一般会員の扱いに変更になるので、その旨事務局あてにご一報ください。

信濃史学会 事務局

訃報

本会 小松芳郎会長が二月二一日に急逝しました。葬儀は同二七日に家族葬でいとなまれ、多くの弔問の方々に見送られ旅立ちました。

略儀ながら会員の皆様にお知らせし、生前お寄せいただいたご厚情に感謝申し上げます。

信濃史学会